第１章　曇曜五窟と『法華経』

第１節　『法華経』の二仏並坐

中国山西省大同の西 15 ｷﾛﾒｰﾄﾙに位置する雲岡石窟は、北魏文成帝時代、沙門統曇曜により発願され着工された。『魏書』釈老志は次のように記している。[1]

曇曜、帝に白さく、京城の西、武州の塞において、山の石壁を鑿ち、窟五所を開き、仏像各一を鑿建す。高きもの七十尺、次は六十尺。彫飾奇偉、一世に冠たり。

文頭に曇曜が師賢に代わり沙門統に就くのが和平の初めとあるので、和平元年であれば西暦 460 年である。一般にこの年をもって雲岡石窟の開鑿の年としている。

そして本稿にいう曇曜五窟とは、この文にいう”窟五所”のことで、現在第 16 窟から第 20 窟の編号が打たれており、様式上では、第１期に属すことが明らかにされている。[2]

わが国における近年の考察としては、吉村怜氏の「曇曜五窟論」と、宮治昭氏の「弥勒と大仏」がある。前者は、五窟を北魏の太祖道武帝 （18 窟） から高宗文成帝 （16 窟） にそれぞれ当てることを試み、各窟の尊格の比定に至っている[3]。後者は、仏教東漸上の大仏を俯瞰して、この五窟の研究史と研究の動向を紹介し、自説を加えている[4]。

が、宮治氏は、「この五体の大仏は、それぞれ異なる尊格を持つと考えられるが、なお不明なものも少なくない」とのべて、この研究が未完であることを示唆している。

本稿は、これらの考察をふまえて、やや別の角度から考えてみたいと思う。それは五窟における同一浮彫の存在を見出し、これを通して典拠となる経典を探り、そして石窟ごとにそれぞれ検討を加えてみるという方法のことである。

さて『法華経』の見宝塔品第 11 では、『法華経』の弘通をすすめる一大イベントが示されている[5]。それは宝塔が虚空に涌出し、中で多宝仏の大音声が聞こえ、釈迦牟尼仏の『法華経』の所説がすべて真実であると証明する場面である。

続いて釈迦牟尼仏の十方分身の諸仏が招集され、浄土が拡大され、釈迦仏が招き入れられて、多宝仏と釈迦仏が並坐し、三箇の鳳詔、すなわち結集した諸仏諸菩薩に『法華経』弘経の誓いを求める儀式が行われる。三箇の鳳詔とは、一つに釈迦滅後に『法華経』を諸菩薩に

---

[1] 北宋・魏収『魏書』114,釈老志(中華書局,1974 初版,8,p.3037),「曇曜白帝,於京城西武州塞,鑿山石壁,開窟五所,鐫建仏像各一。高者七十尺,次六十尺,彫飾奇偉,冠於一世」の文。

[2] 宿白「平城における国力の集中と〈雲岡様式〉の形成と発展」(雲岡石窟文物保管所『雲岡石窟』文物出版社・平凡社, 1992,1,p.170-199 の中の p.174-175)。

[3] 吉村怜「曇曜五窟論」(『中国仏教図像の研究』東方書店,1983, p.153-175 所収)。

[4] 宮治昭「弥勒と大仏」(『涅槃と弥勒の図像学』吉川弘文館,1992,p.389-410 所収のうち p.392-393)。

[5] 後秦・鳩摩羅什訳『妙法蓮華経』見宝塔品 11,(『大正蔵』,1927,9,p.32b-34b)。

付属し、その弘通を勧めること。二つに重ねて令法久住を示し、誓言を求めること。三つに多宝とともに、釈迦仏の結集した化仏達に誓言を求めることである。[6]

造像例では、釈迦･多宝の二仏が龕内に並坐する形をとるのが一般的である。二仏はほとんど同形なので、左右どちらが釈迦仏かは見分けがつかない場合が多い。ともかく、この二仏並坐は『涅槃経』巻 34 で

「一世界の中に二仏の世に出でんこと、是の処あることなし」

と否定されているように、他の経典ではほとんど説かないので、『法華経』独自の内容を端的に示すものである。[7]

さて、雲岡石窟のうち、いわゆる曇曜五窟とよばれる第 16～20 窟をみると、いずれの石窟においても、この二仏並坐の浮彫が見出される点が注意をひく。たとえば、第 16 窟の西壁中段（図 2-3 参照）、第 17 窟の南壁下段と明窓東壁下、第 18 窟の東南隅上段（図 2-8 参照）、第 19 窟の南壁東側中段と門口東壁、第 20 窟の東壁端上下（図 2-17 参照）などである。[8]

じつは本稿考察の出発点もここにあるが、この二仏並坐浮彫が夥しく見出されることは、すでに先達も承知していた。例えば塚本善隆氏は、龍門石窟の古陽洞の仏像にふれて、

「二仏並坐像は法華経に説かれている多宝･釈迦の二仏像であることは疑いなく、交脚菩薩像が弥勒菩薩であることも、造像記によって疑いない」

「大同時代から洛陽時代につづいて、『法華経』信仰が有力な流れをなしていたことを両石窟（雲岡、洛陽）を通してうかがい得るわけである」[9]

といい、水野清一氏は、「『法華経』信仰のもっともつよい反映とみられる二仏並坐像がむやみに多い雲岡石窟において……」とのべている。[10]

山西省文物工作委員会による『雲岡石窟』では、曇曜五窟に続く第 2 期の、第 7～8 窟の項で、釈迦･多宝二仏並坐の存在を指摘している。[11] 第 1 期の曇曜五窟においてなぜ二仏並坐に言及しなかったかは、推測の域を出ないが、恐らく五窟においては主題の中心でなかったことに起因するのではないかと思われる。

---

[6] 三箇の鳳詔, 隋･智顗説『法華文句』8 下,(『大正蔵』34, 1926,p.114)。

[7] 北涼･曇無讖訳『涅槃経』34,二仏並出の失(『大正蔵』12,1925,p.569a.),「一世界中二仏出世,無有是処」の文。

[8] 『雲岡石窟』(上掲注 2,2,p.286-289) ,確認できる図版は以下の通りである。 16 窟 (2-143,145), 17 窟 (2-155,170), 18 窟 (2-171,172,173) ,19 窟 (2-179) ,20 窟 (2-185)。

[9] 塚本善隆「北魏窟に現れたる仏教」(『支那仏教史研究』清水弘文堂書房, 1969, p.508-564.所収のうち,p.520,523, 525)。

[10] 水野清一「観音菩薩と普賢菩薩－雲岡図像解－」(『中国の仏教美術』平凡社, 1968, p.262-268 所収のうち,p.267)。

[11] 山西省文物工作委員会,山西雲岡石窟文物保管所『雲岡石窟』(文物出版社, 1977, p.7)。

ともかく、当該五窟がこの二仏並坐をいずれも描出することで『法華経』と深く関わることは確かである。以下、各窟ごとにこれを検討してみよう。

第２節　各窟の検討

１．第 16 窟

第 16 窟（図 2-1）は、高さ 14 ﾒｰﾄﾙの仏陀立像で、漢風着衣の像であることから、他の窟に遅れることが指摘されている。そしてこの像は右手を挙げて施無畏印をとり、左手を垂下して第一指と第三指を捻じているので、衆生を安心させて救済する、何らかの動作を示していることがわかる。とくにこの左手の指に注目してみよう（図 2-2）。

『法華経』如来神力品第 21 では、釈迦牟尼仏の六大神力（吐舌相、通身放光、謦欬、弾指、地六種動、普見大会）のひとつとして、弾指を示している。[12]

『佛学辞典』では、弾指について親指と人差し指、もしくは親指と中指に人差し指を加えて弾いて音を鳴らすとある。そして典拠として、『法華経』の当品のほか、『華厳経』巻 79、『増一阿含経』巻 28 などをあげている。[13] 当第 16 窟の場合は、人差し指の先は欠けているが、親指と中指は擦り合った形をとっているので、後者の説明の弾指であったというべきであろう。

当如来神力品の内容は、大神力により娑婆世界に出現した釈迦牟尼仏が、舌相をおさめて後、謦欬し弾指したことで、衆生は二仏並坐する釈迦･多宝の姿、無量の菩薩、そして四衆を見ることができ、大歓喜して釈尊の教説を聞くとある。石窟内壁の西壁から南壁にかけて一部見える二仏並坐と坐像の仏陀、交脚像、千仏（図 2-3） はこの内容に符合している。

よって、弾指する仏陀立像は、一応この如来神力品を説く釈迦牟尼仏として理解されるわけである。とすると、この説法が釈尊なき後の衆生へ弘通する、結要付嘱とよばれる、『法華経』中最大級の儀式である点からみても、当第 16 窟と『法華経』とは、かなり深い関係にあるということになるであろう。[14]

２．第 17 窟

第 17 窟は、頭冠をつけていることと交脚像であることから、本尊が弥勒菩薩とされる点で、これまで異論はない（図 2-4）。これをふまえて当窟の各壁面に二仏並坐を彫出することで弥勒菩薩と『法華経』との関係を探ってみよう。

『法華経』では従地涌出品第 15 で、諸菩薩が釈迦･多宝二仏のいる宝塔の下に参詣し、娑婆世界の下方より涌出する、新たな菩薩群像を見て疑念を起し、弥勒菩薩が代表して釈尊に問うくだりがある。実はこの時周囲が、弥勒は釈尊に授記されて釈尊の次に作仏する未来仏

---

[12] 弾指,(上掲注 5,『大正蔵』9,p.51c)。

[13] 『仏学辞典』(北京･中国国際広播出版社, 1993, p.1215)。

[14] 結要付嘱, 天台『法華文句』10 下,(上掲注 6,『大正蔵』34,p.142)。

であることを明らかにして、次のようにのべている。

「その時に諸仏、おのおの侍者に告げたまわく、諸の善男子、しばらく須臾を待て。菩薩摩訶薩あり名を弥勒という。釈迦牟尼仏の授記したもうところなり。次いで後に作仏すべし」[15]

第 17 窟はこれをふまえて弥勒を造像したのではないかと想像される。ただ、頭冠をつけ交脚で坐す当像が、弥勒菩薩か弥勒仏陀かはあまり定かではない。が、当時の北魏時代が三世仏思想下であったとされているので、高さ 16.3 ﾒｰﾄﾙの巨大な像であることからみて、未来仏としての弥勒を示したとみるべきであろう。[16]

一方、中央交脚本尊の左右に二仏が浮彫されている。一つは坐仏禅定の姿 （東壁） 一つは立仏説法の姿 （西壁）である（図 2-5）。ともに仏陀像なので、いずれも釈尊の何らかの動作をさしているのであろう。

当品でいえば、東壁の禅定坐仏は、諸菩薩が虚空に出現した釈迦･多宝の二世尊瞻仰後、五十小劫の間黙然として坐し続けたという釈尊であり、西壁の立仏は、まさに本品を説法する釈尊となるであろう。したがって、周囲の千仏は、無量千万億の他方国土から来たという釈尊分身の諸仏として理解されるのではあるまいか。

なお本品での説法は、『法華経』全体を二分する内容が含まれており、この品から釈尊の成道が久遠の過去であったことを明かす段に入る。すなわち、釈尊が、弥勒を代表とする諸菩薩に対して、新たに出現した地涌の菩薩の教化を、何時したかをめぐって疑いを生じさせる、いわゆる動執生疑とよばれる、教義上の重要な部分に当っている。[17]

３．第 18 窟

第 18 窟では、三方の壁面にかなりの数の二仏並坐浮彫が確認できる。また、本尊の着衣に多数の化仏が付せられていること（図 2-6）。そして左右に立つ脇士がそれぞれ仏陀像で、各一人の菩薩を伴うことなどを特色とする（図 2-7）。これらの特色を満たす『法華経』の該当品に、見宝塔品第 11 がある。が、それぞれを説明する前に、当品の内容をみてみよう。

当品は、『法華経』弘経の功徳深重を説いて流通をすすめる中で、一大イベントが示されるところである。すなわち、地より涌出する宝塔と、その宝塔の中の多宝如来が、釈尊の『法華経』説法を正当真実であると証明し、ついで宝塔の中へ釈尊を招き入れて、釈迦･多宝二仏並坐して、娑婆世界での『法華経』説法の付嘱を明らかにするという、いわゆる二仏並坐を主題とする内容である。[18]

---

[15]上掲注 5,(『大正蔵』9,p.40b-41a),「尓時諸仏名告侍者,諸善男子,且待須臾,有菩薩摩訶薩名曰弥勒,釈迦牟尼仏之所授記,次後作仏」の文。

[16] 上掲注 11,(p.5-6)。

[17] 動執生疑, 天台『法華文句』9 上, (上掲注 6,『大正蔵』34,p.126)。

[18] 上掲注 5, (『大正蔵』9,p.32b-34b)。

つぎに、造像上の特色について説明してみよう。まず、二仏並坐の多い点（図 2-8） は、そもそも当品の主題が、二仏並坐による娑婆世界での『法華経』説法の付嘱を明らかにすることであり、これを図示したものが二仏並坐像であれば、この像の多いことは当然であろう。したがって、多数の二仏並坐が示される点は、このテーマの強調とともに、『法華経』が説法されるあらゆる場所に二仏並坐が出現することを意味していると理解すればいいと思う。

つぎに十方分身の諸仏が各一人の侍者をつれているという点については、つぎのようにある。

「この時に諸仏、各一人の大菩薩をひきいて、もって侍者となし、娑婆世界に至って、各宝樹の下に到りたもう。一々の宝樹高さ五百由旬、枝葉華果しだいに荘厳せり。諸の宝樹の下にみな師子の座あり。……」[19]

第 18 窟北壁の東側に、彫り出された宝樹様の華蓋と、その下の蓮華座に立つ高さ 9 ﾒｰﾄﾙの仏陀、そして隣に立つ一菩薩の組み合わせが見える。これは西側にもあるので、一々という上記の内容にあてはまると思われる。さらに周囲の浮彫する諸衆が、それぞれ蓮華を持つ様子は

「各宝華をもち、掬に満てて之に告げて言わく、」[20]

とある記述に符合する。

では、本尊の着衣に多数の化仏が付されている点については如何であろうか。これは、かつて吉村怜氏の指摘した『華厳経』の内容を比較検討しなければならないと思われる。吉村氏は、先学の研究を受けて、盧舎那仏の放つ大光明が十方を照らし出す時、諸毛孔中から仏身の雲、化仏の雲が出現して、十方世界に充満していくとの『華厳経』の記載を典拠とされた。[21]

じつはこれと極めて近い記述が、『法華経』普賢菩薩勧発品第 28 を補完する経典としての『観普賢菩薩行法経』の一節にある。この『観普賢経』では多宝塔出現の観想を勧める中で、つぎのように記している。

「大衆集りおわって、釈迦牟尼仏を見たてまつれば、挙身の毛孔より金色の光を放ちたもう。一々の光の中に百億の化仏います。」[22]

大衆の見上げる釈迦牟尼仏の挙身の毛孔から金色の光が放たれ、その光の中に百億の化仏

---

[19] 同上, (『大正蔵』9,p.33a),「是時諸仏,各將一大菩薩,以為侍者。至娑婆世界,各到宝樹下。一一宝樹,高五百由旬,枝葉華果,次第荘厳。諸宝樹下,皆有師子之座,……」の文。

[20] 同上, (『大正蔵』9,p.33b),「各齎宝華,滿掬,而告之言」の文。

[21] 吉村怜「盧舎那法界人中像の研究」(『中国仏教図像の研究』,上掲注 3, p.7-34.のうち,p.14-19, p.23-31)。

[22] 劉宋・曇無密多訳『観普賢菩薩行法経』(『大正蔵』9, 1925,p.389-394.のうち,p.391b,392c),「大衆集已,見釈迦牟尼仏,挙身毛孔,放金色光。一一光中有百億化仏」,および「釈迦牟尼名毘盧遮那遍一切処,其仏住処,名常寂光」の文。

が出現するという点は、吉村氏の内容とほとんど変わらない。またこの後段では、

「釈迦牟尼仏を毘盧遮那遍一切処と名づけたてまつる。その仏の住処を常寂光と名づく」ともある。

すでによく知られているが、『観普賢経』は後に『法華経』の結経に位置づけられていくほか、毘盧遮那仏は『華厳経』の本尊となっていくわけである。

したがって、もし『観普賢経』と関連するとすれば、この経典は劉宋の曇無蜜多（420－478）訳であるから、この経典の翻訳時期（元嘉年 424～453）と、雲岡五窟の造像時期（460－470）とがほとんど並行する点に問題が残されることになろう。

また『華厳経』と関係するとすれば、吉村説以前『華厳経』による盧舎那仏の造像は、西暦 500 年より前に中国で行われていたか疑問におもう、と述べた水野清一氏の指摘が思い出される。[23]

また『華厳経』による図像は、6 世紀（北周）とされる敦煌莫高窟第 428 窟の南壁や、8 世紀前後のクチャやキジル石窟の壁画などにみられる（図 2-9）。が、そこでは仏、菩薩のほかに仏殿や楼閣そして人物や円輪など、いわゆる法界の諸形象を図示した点に特色があり、単なる化仏の雲集ではないことも注意していいであろう。

そこで『法華経』見宝塔品第 11 に戻って考えてみると、十方世界で説法中の釈迦牟尼仏の分身をすべて一処に還集し、そこへ自身が出現すると誓う、多宝仏の深重の願についての釈尊の説法がある。偈の部分ではつぎのようにいう。

「其多宝仏　雖久滅度　以大誓願　而師子吼、多宝如来　及与我身　所集化仏　当知此意」[24]

従来の書き下し文の読みは、

「其れ多宝仏久しく滅度したもうと雖も、大誓願を以って獅子吼したもう。多宝如来、及与び我が身、集むる所の化仏、当に此の意を知るべし」[25]

とある。この場合、多宝、釈迦、化仏の三者をあげているとすると、これは釈尊の説法であるから、釈尊が自身に対しても此の意を知るべしと呼びかけているという矛盾が生じることになろう。

中国語の辞典で調べてみると、与は文言の介詞として、跟、同、…と、…に、に対して、とあり、動作の相手をさす意がはいっている[26]。したがって、ここでは及と与を同意にとっ

---

[23] 水野清一「いわゆる華厳教主盧遮那仏の立像について」(『中国の仏教美術』,上掲注 10, p.135-155 所収のうち p.155)。

[24] 上掲注 5,(『大正蔵』9,p.34a)。

[25] 『法華経』坂本幸男訳(岩波文庫, 1964,中,p.194)。

[26] 香坂順一『現代中国語辞典』(光生館,1982,p.1576), 北浦藤郎ほか『基礎中国語』(講談社 1991 p.979), ともに文例として与虎謀皮（虎にその皮をよこせとたのむ,できない相談ごと）を示している。

て二字を合わせるのではなく、

「多宝如来、及び我が身に集むる所の化仏、」

と読み、多宝如来と化仏の二者を指したとみるべきであろう。

その結果、「我が身に集むる所の化仏」は、我が身が第 18 窟本尊の釈迦牟尼仏であるから、その着衣上の化仏が「我が身に集むる所の化仏」に当たるわけである。

４．第 19 窟

第 19 窟の本尊（図 2-10）を多宝仏かとされたのは、先の吉村氏であるが、その根拠については明示されていない。私見であるが、曇曜五窟中この窟が最も奥深く巨大である点からみて、その可能性を引き出してみよう。

まず、仏龕の入口壁面を、わざわざ凹字形に削り取っていること（図 2-11）。これは他の仏龕の例でも見出すことができる。例えば第 33 窟で、凹字形に掘り込みがなされている（図 2-12）。そして、この中央に二仏並坐があり、宝塔の内部を顕現する様子を示しているようである。とすると、この凹字形は宝塔を形造る意味が込められていたのではないかと思われる。

第 11 窟の外壁上方をみると、釈迦･多宝二仏の仏龕が一対をなしていることが知られる（図 2-13）。これをヒントにして、第 19 窟が、隣の第 18 窟と一対をなしていると想定すれば、おそらく当第 19 窟は、本来過去仏の存在である多宝仏の、宝塔窟の可能性が生まれてくるであろう。第 11 窟上方は釈迦･多宝左右の配置が逆であるが、この反対の例は、その隣第 12 窟の外壁上方において見出すことができる（図 2-14）。したがって、おそらく釈迦･多宝二仏の左右の位置づけは、あまり厳格でなかったということであろう。

つぎに、19－1、19－2 とよばれる脇士洞の存在について考えてみよう（図 2-15）。この第 19 窟の両脇士洞は、中央に倚坐して説法する仏と、左右に立像菩薩の、いわゆる三尊像形式である。したがって、両脇士洞とも何らかの仏陀であることがわかる。

上述の第 33 窟 （図 2-12 参照）では、左壁に交脚の倚坐像がみえる。一般に、交脚倚坐像は弥勒菩薩の姿と理解されるけれども、ここは凹字形であるから宝塔の一部をなしているはずである。したがって、弥勒菩薩でない可能性が高い。

見宝塔品第 11 では、多宝如来は

「菩薩の道を行ぜし時、大誓願を作した」[27]

と述べている。そこで、倚坐像が弥勒菩薩から、菩薩一般へも及ぶイメージであったとすると、ここでの倚坐像は、多宝如来の菩薩時代を意図した表現とみても、理解できなくはない。

また、同品では多宝如来が、過去･現在･未来の三時において、釈尊の『法華経』説法を「善哉、善哉」と讃嘆する行為が記されている[28]。これは、おそらく弥勒の三会説法が、敦煌石

---

[27] 上掲注 5,(『大正蔵』9,p.32c),「国名宝浄,彼中有仏,号曰多宝,其仏行菩薩道時,作大誓願」の文。

[28] 同上, (『大正蔵』9,p.32b-c)。

窟第 249 窟の三壁に描写されたと同じように考えて、この雲岡においては、凹面の三方に現出する仏陀を、この過去･現在･未来の三度の多宝仏説法として理解すればよいのではないかと思われる。

すでに剥落しているが、第 19 窟の内外壁にみえるおびただしい千仏表現は、まさにこの多宝仏の願行の記述に合致している。すなわち、多宝仏が釈迦分身の諸仏を悉く一処に還し集めて後、多宝仏自身が宝塔とともに涌出し、そして、この集められた十方の諸仏が、娑婆世界の釈迦牟尼仏のみもとで、多宝如来の宝塔を供養すると誓う、その様子を表したものと理解できるからである。

５．第 20 窟

第 20 窟は前壁が崩壊しているため､逆に本尊がよくみえる状態になっている（図 2-16）。よくみると、本尊は禅定印を結んだ禅定坐仏で、両脇士も仏陀像であることがわかる。向かって右（ 東側）の脇士は、右手が施無畏印をとる立像の仏陀で、西側は蓮座と火焔の頭光を一部残しているが、像はすでに失われている。この第 20 窟の、向かって右の脇士仏の上下に、二仏並坐が彫りだされているので、これも『法華経』との関係で考えてみることができる（図 2-17）。

本尊が禅定印である点から、禅定を重視する品を探してみると、化城喩品第 7 と、分別功徳品第 17 の二品あることがわかる[29]。化城喩品は、過去仏たる大通智勝仏の禅定の姿を象徴的に描き、分別品では、弥勒を対告衆に五波羅蜜をあげ、その最後に禅定を説いている。

この第 20 窟の問題を解決するため、ここで、やや時代の下る北魏中期の作とされる、同一の禅定大仏を造像した第 5 窟と比較してみよう[30]。第 5 窟（図 2-18） の場合は、禅定印を結ぶ本尊の様子のほか、仏陀立像の脇士があり、形式的にも近いようである。とくに重修されていた仏像の表面を剥いだ、現在の様子で比較してみると、本来の第 5 窟の造像は、第 20 窟の各像にきわめて近いことがわかる （図 2-19）。おそらく両窟の造像は、時期的にもあまり離れていなかったのではないかと思われる。

そして、この第 5 窟のもう一つの特色は、南壁中段に 8 体づつ 2 段にわたる 16 体の仏陀の坐像がみえることである（図 2-20）。これは化城喩品第 7 にいう大通智勝仏の 16 王子の成道の姿にあてはまるであろう[31]。とすると、本尊と脇士の形体上の同一性と、様式上での類似性を合わせ考えると、第 20 窟においても、あるいはすでに崩れ去った南壁に 16 体の仏陀像があったのかもしれないと想像される。が、それはともかく、両窟が同一テーマによる造像とすれば、第 20 窟は、おそらく分別功徳品第 17 の禅定よりもむしろ、化城喩品第 7 に

---

[29]上掲注 5,化城喩品 7（『大正蔵』9,p.22a-27b 所収のうち p.22b), 分別功徳品 17（『大正蔵』9, p.44a-44b 所収のうち p.44c-45a)。

[30]『雲岡石窟』(上掲注 2) 1,図 27-50,『雲岡石窟』(上掲注 11) 図 10-12。

[31]上掲注 5,化城喩品 7 の十六仏（『大正蔵』9,p.25b-c)。

よる過去仏、大通智勝仏の禅定の姿を表わしたものとみることがいいであろう。

この章は、釈尊の過去世に遡る法華経の因縁を説いている部分である。すなわち、過去三千塵点劫の昔に出現した大通智勝仏が、国王時代の 16 人の王子に法華経を説いて入定し、16 王子がこれを覆講し、多くの衆生が結縁した。これを一般に大通結縁とよび、その 16 番目の王子が、実は釈尊自身であったという内容である。

なお、この化城喩品第 7 では、大通智勝仏に天華を散ずる諸梵天が記されているので、第 20 窟本尊の光背左上にみえる天人の散華供養の姿は、これに符合する諸梵天と言うべきであろう。

第３節　まとめと展望

以上の考察を通して知られる点をまとめてみると、以下の通りとなる。

石窟№	特徴	典拠	意義	本尊
16	弾指	『法華経』如来神力品 21	結要付嘱	現在･釈迦仏
17	頭冠･交脚	『法華経』従地涌出品 15	動執生疑	未来･弥勒仏
18	衣上化仏	『法華経』見宝塔品 11	三箇鳳詔	現在･釈迦仏
19	凹字龕	『法華経』見宝塔品 11	宝塔涌出	過去･多宝仏
20	禅定仏	『法華経』化城喩品 7	大通結縁	過去･大通智勝仏

各窟の主な造像を、過去･現在･未来の三世仏であるとする点は、すでに指摘されていたが、当『法華経』経典上でも納得がいく。それは上の表に書き入れたように、多宝仏と大通智勝仏が過去仏、釈迦仏が現在仏、弥勒仏が未来仏となるからである。

そして、五窟に比定された典拠から見直してみると、実はいずれも娑婆世界を舞台に展開するという特色がある。恐らくこれは、当時の仏教が、皇帝即如来思想にもとづく、現実の社会と結びついた証左とすべきであろう。そして、あの巨大な造像は、本稿で裏づけた『法華経』との関係からみても、基本的には釈迦仏を中心とした大乗仏教であり、これが当時流布していたと理解すればいいであろう。

このほか、この曇曜五窟それぞれを北魏時代の如何なる皇帝に当てるかという問題が残されているけれども、これは検討すべき事柄も多いので後考を俟つことにしたい。